

神戸大学「志」講義 —新時代を切り拓く羅針盤を身につけるために—

Lecture for Acquiring the Mindset “KOKOROZASHI”

鶴田 宏樹 (神戸大学 工学研究科 道場「未来社会創造研究会」 准教授)
祇園 景子 (神戸大学 工学研究科 道場「未来社会創造研究会」 特命助教)
大村 直人 (神戸大学 工学研究科 道場「未来社会創造研究会」 教授)
齋藤 政彦 (神戸大学 副学長、数理・データサイエンスセンター センター長)

要旨

加速度的に変化する社会を生き抜く人材をどう育成していくかが現在の大学が抱える大きな課題である。不確実性の高い現代社会では、解決すべき問題・課題を誰かが与えてくれるわけではなく、学生自らが「問い」を立てて学び、そして解決策を導き、社会の評価を問うというプロセスを試行錯誤しながら進めていかなければならない。このプロセスを回していく原動力が生きるための行動指針である「志」と言える。本論文では、神戸大学が平成 28 年度に開講した「志」講義が必要とされる社会背景、如何にして「志」を醸成させるかの議論および講義の設計、講義の振り返りを紹介する。本講義は、単なる座学形式の講義とは異なり、講師の話に基づき学生と講師・コーディネータ教員との対話・議論を展開することで、学生自身が持つ「志」を如何に再確認し、大学生活を含む今後の生活で何とすべきかを考え、共有することを狙いとしている。講義終了後のコミュニケーションシートやアンケートから、その狙い通りに学生自身が自らの「志」をしっかりと考える機会を提供できたと判断した。

はじめに

現在、社会構造は大きく変化しつつあり、未来社会に向かって加速度的に変化を続けるとされている。人間が対峙しなければならない問題も複雑化している現代社会において、学生自身がいかなる行動指針「志」を持って、人生を生き抜くための教養を身につけることが重要である。大学という高等教育機関が、高度な知識を備え、生き抜く力を身につけた人材をいかに育て、未来の社会に貢献できるかが大きな課題となっている。この課題に対して多くの大学で様々な取り組みがなされているが、これからの社会を生き抜くための行動指針である「志」をどう醸成するかに着目した事例は少ない。次世代を担うリーダーを育成するためには、課題解決型教育の整備とともに「志」の醸成に関わる新しい教育プログラムの開発と実践が必要であると考えられる。

1. 「志」とは

1.1 「志」の定義

「志」とは、国語辞典を引くと①ある方向を目指す気持ち。心に思い決めた目的や目標。「志を遂げる」「事、志と異なる」「志を同じくする」「青雲の志を抱く」、②相手のためを思う気持ち、書かれており、ヒトが何かを行動する際の行動指針やステークホルダーへの理解であると解釈できる。神戸大学では、入学式における武田廣学長の挨拶(武田 廣, 2018)において、「志」特別入試について、「グローバル化されていく社会の中で、各分野のリーダーとなって 21 世紀の人類社会に貢献したいという高い「志」を持った学生を、新たな学生選抜方法で見出そうとするものですが、この話は特別入試だけに限ったものではありません。皆さんはこれまでの厳しい受験勉強を経て、本日、この式典に出席しておられますが、神戸大学への入学はゴールではなく、それぞれの将来像を持って学修に励み、専門分野を探究して社会へと羽ばたいていく、そのスタート地点です。単に知識を集積するだけではなく、その知識を得て将来何をなすのか、皆さんの目標、「志」をもう一度見つめなおしてください。」と述べている。この未来創造への行動指針としての「志」が神戸大学で学び育成すべき重要なものとして位置づけられている。

2. なぜ「志」が必要か

2.1 加速度的な社会の変化と「悪」問題

紀元前 3.5 万年から 8000 年までの「狩猟採取の時代」から、農耕・牧畜技術の発明・発展により、紀元前 8000 年から西暦 1800 年までの「農耕牧畜の時代」への以降は成人になる年齢を 15 歳とすれば約 2,000 世代が必要であった。その次の世代となる「工業の時代(1800 年から 1980 年)」には産業革命をきっかけに社会が大きく変化した。この時代へ変遷するためには、成人年齢を 20 歳とした場合に約 490 世代の時間を要した。IT 革命と呼ばれる情報の時代(1980 年から現在)に至るには、社会に出る年齢を 25 歳とした場合に約 7 世代の時間を必要とした(鶴田ら, 2018)。2000 年以降には科学技術が加速度的に変化していることもあって、通信情報技術(ICT)の急激な変化が世界的な規模で情報・人・組織・物流・金融などのあらゆる事柄がリアルタイムに結びつき、相互に影響を及ぼし合う新たな状況が生まれてきている(内閣府, 2016)。これらの情報の統合化は、社会システムを加速度的に変化させる。

その一方で 21 世紀における解決すべき問題は非常に複雑である。この問題解決にはこれまでに蓄積された既存のアプローチが通用しない。日本においてもエネルギー・資源・食料などの制約、少子高齢化や地域経済社会の疲弊といった様々な要因が複雑に絡み合った問題が可視化されている。これらの問題は、問題自体が不明確(悪定義)で解決の手段が不明確(悪構造)で唯一の最適解が存在するように設定されていない(悪設定)ものが主となっている。これに対して初期状態、利用可能な手段が明確(良定義)で、解決の手

順が明確（良構造）、そして解が唯一存在する（良設定）問題は、高度成長期に日本など生産効率を重視していた時代や高校までの教育においては解決すべき問題であったものの現代社会における問題は軒並み「悪」問題に分類される（表 1）。

表 1 良質な問題と悪質な問題 well- and ill-xxx problems

良定義問題 (Well-defined problem)	良定義問題 (Well-defined problem)
初期状態、目標状態、利用可能な手段が明確な問題	定義が不明確な問題
良構造問題 (Well-structured problem)	良構造問題 (Well-structured problem)
解決の手順が明確な問題	解決の手順が不明確な問題
良設定問題 (Well-posed problem)	良設定問題 (Well-posed problem)
解が唯一存在する問題	唯一最適解が存在するように設定されていない問題

出典：慶應義塾大学システムデザインマネジメント研究科白坂研・五百木研合同ゼミ資料から抜粋して改変した。

この「悪」問題が複雑化した社会における問題解決は、ヒト個人が自ら問い（課題）を立て解決策を考案し、この課題と解決策の組み合わせが社会に価値をもたらすか否かを問い続けなければならない。

様々な科学技術の進歩によって活用できるテクノロジーは豊富に存在している。しかし、明確な問題・解き方も提示されず唯一最適化が存在しない「悪」問題社会に対峙するためには、個人・集団の行動指針となる「志」が重要となる。

2.2 価値創造における「志」の重要性

「大学教育研究 第 26 号」においても論じたが、筆者らは社会に新しい価値を提供し社会を変化させる次世代リーダーとは課題設定力・解決力と価値変換スキルを持つ人材であると定義した（鶴田ら, 2018）。2015 年 4 月に公益社団法人 経済同友会の提言「これからの企業・社会が求める人材像と大学への期待」（経済同友会, 2015）に企業、特に経営者が求める人材像に普遍的に求められる資質・能力が整理されている。現在の産業界は、1) 変化の激しい社会で課題を見出し、チームで協力して解決する能力（問題設定力・解決力）、2) 困難から逃げずにそれに向き合い、乗り越える力（耐力・胆力）、3) 多様性を尊重し、異文化を受け入れながら組織力を高める力、4) 価値観の異なる相手とも双方向で真摯に学び合う力（コミュニケーション力）をもつ人材を求めている。神戸大学においてもどのような次世代リーダー人材を育てていくべきかを産業界の経営層・大学執行部・部局長で議

論を行った（平成28年5月17日「第1回理工系人材・イノベーション人材における産学官円卓会議」）。その結果、その会合を経てこれまで議論を重ねることで、神戸大学が輩出する人材像としては、新しい価値を創出する人材として、1) 高い専門知識、2) 自らの未来に向けたしっかりとした行動指針の設定力、3) 失敗を恐れないコミュニケーション能力（お笑い文化）、4) 問題に対峙するための思考力（課題設定力・解決力）、5) 胆力・耐力を生む情熱、6) 学ぶべき知の選択と融合力を備えていることが必要であると結論した。

2.3 社会を変革させる人材に求められるもの

神戸大学が輩出すべき人材が持つべき能力である「自らの未来に向けた行動指針」は、まさに個人・集団の「志」と言えるが、「志」講義を開講するにあたり、担当者の間でもそもそも学生は行動指針としての「志」を持っているかについての議論を行った。「志」講義と同様に、筆者らはイノベーション科目と位置付ける別講義として「企業社会論」を開講している。この講義は、前期に入学直後の1回生を対象に、様々な産業分野で発展している企業の経営者・中堅社員によるオムニバス講義で、当該産業分野でのその企業のポジショニング、その企業の中での講師が何を考えて行動しているか、そして学生時代に何を考えて生活していたかを紹介してもらい、学生自らのキャリアを考えてもらうための講義である。平成28年度4月の講義のオリエンテーションで受講登録のためのエントリーシートに書かれた受講希望を読んでみると1050名の受講希望者のうちで、およそ1/3が「地域社会に貢献したい」「起業したい」など、将来の夢や希望をもっていた。講義中の議論の中では、「ではその夢や希望に到達するために何をすべきか」という問いについて、質問に答えた10人程度の学生からは、「ぼんやりとは理解してるが具体的に何をすべきかはわからない」という意見が出た。これらは、定量的なデータではないものの、多くの学生は行動指針となる「志」を持っているものの、学生自身の中でも構造化・言語化できていないのではないかという仮説を立てるに至った。

3 「志」講義とは

3.1 神戸大学の価値創造教育と「志」講義

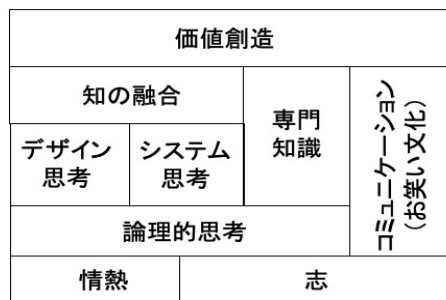


図1 価値創造の基本構造

神戸大学が輩出すべき次世代のリーダーが備えている資質とは、前述したように1) 高い専門知識、2) 自らの未来に向けたしっかりとした行動指針「志」の設定力、3) 失敗を恐れないコミュニケーション能力（お笑い文化）、4) 問題に対峙するための思考力（デザイン思考・システム思考・ロジカル思考、5) 胆力・耐力を生む「情熱」、6) 学ぶべき知の選択と融

合力（知の融合）である（図 1）。神戸大学は、平成 28 年度から、これまでの大学での講義で得られる 1) に加えて、価値創造の能力を体系的に習得するために図 2 に示すような講義群を共通教育カリキュラムに整備してきた。企業の経営者となっている卒業生から講師自身の人生の行動指針から、学生それぞれの「志」を言語化・構造化させることを到達目標とする「志」講義を 1 回生の第 1Q に設定した。Creative School については「大学教育研究 第 26 号」において位置付けと内容を報告した（鶴田ら, 2018）。今年度から Creative School も総合科目として開講し、価値創造教育のコンテンツが体系化された（図 2）。

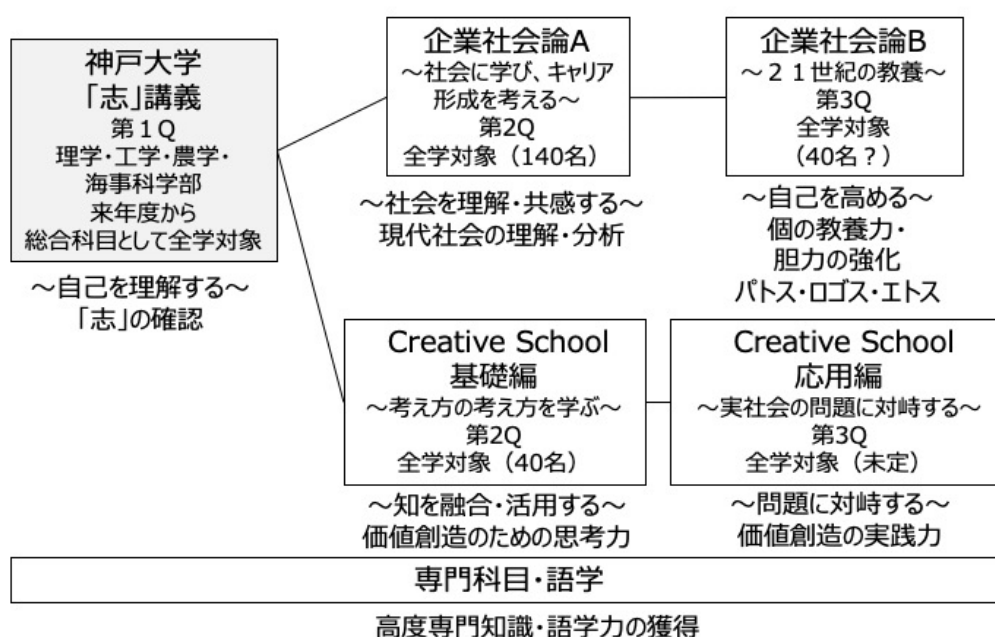


図 2 神戸大学の価値創造教育

昨年度から開講している「志」講義では、1 コマ 90 分間で 8 回の講義のうち、初回オリエンテーションと最終回のまとめを除く 6 回を外部講師の講義とした。各回 90 分のうち、60 分間程度を講義、30 分間を内容についての議論の時間とすることで各回の講師の経験と考えとの比較から自分の「志」を再認識させるように教員からファシリテートした。

3.2 講師と概要

「志」講義は、これまで平成 29 年度及び平成 30 年度に開講しているが、講師は同一である。

○ガイダンス 齋藤政彦、大村直人、鶴田宏樹、祇園景子

○相馬芳枝 講師：1965 年・理学部卒、立命館大学総合科学技術研究機構上席研究員、元神戸大学特別顧問、2011 年世界化学年女性化学賞受賞

【タイトル】「志は高く」

【概要】皆さんが元気で活躍できる期間は、これから約 70 年。70 年といえば長いように思うかもしれませんが、ほぼ 70 年を過ごしてきた私には、アツという間でした。チャレンジして有意義に充実した人生を歩んで頂きたいと思います。そうするためには、人生を貫くような長期的な目標と 5～10 年毎の短期的な目標を定め、一歩ずつ前進することが大事でしょう。「末は社長かノーベル賞」ぐらいの高い目標を持っていただきたいのです。これからは、グローバル化がどんどん進みます。英会話は必須。若い間に外国で修行することはかけがえのない財産になることでしょう。

○田邊弘幸 講師：1968 年・経営学部卒、元双日・副社長、神戸大学特別顧問

【タイトル】 商社マン生活 50 年～グローバル化の深化と危うさ

【概要】海外駐在 9 年、海外出張 200 回、等を含め商社マン生活 50 年となった。この 50 年は日本の国際化への永遠の対応であり、グローバル化へと向かう世界の挑戦でもあった。同時にグローバル化の深化は世界の不安定と危うさともたらしつつある。皆さんはどう生きる？

○番 尚志 講師：1969 年・経営学部卒、三菱倉庫（株）特別顧問・元副社長

【タイトル】 企業の社会的役割と経営者のあり方

【概要】1969 年（昭和 44 年）に神戸大学を卒業後三菱グループの老舗ロジスティック企業の社長・会長を務め、又、その経営に携わっていた経験を基に、企業の目的はいかにあるべきか、経営責任とは何かを考える。

○松尾憲治 講師：1973 年・経済学部卒、明治安田生命特別顧問・前社長

【タイトル】 未来を考えよう

【概要】皆さんが生きる未来は、私が社会に出て生きてきた 50 年とは大きく変わります。わが国は超高齢社会、低成長経済、財政逼迫、環境問題など多くの課題を抱えています。そうした中で、人生 100 年時代を生きる皆さんにとって、どんな未来が待っているのか、考えてみたい。加えて、自分自身のこれまでの人生を振り返って、得られた教訓や反省を話してみたいと思います。

○森口隆宏 講師：1967 年・経済学部卒、元 JP モルガン証券会長兼 CEO・元東京三菱銀行副頭取

【タイトル】 国際金融業界 50 年に亘る経験から見たグローバル金融経済の変遷と今後の

展望

【概要】国際金融業界での50年に亘る業務経験の中でその時々遭遇した大きな金融経済関連の事象・事件や主要国の重要政策変更などに触れながら、今日に至るグローバル金融経済の大きな流れを掴み、今後の課題を探りたい。

○鴻池一季 講師：1974年・工学部卒、鴻池組名誉会長、神戸大学工学振興会理事長

【テーマ】志とビジョン

【概要】大学に入学したこの時期に改めて「志」の意義について考える。「志」の必要性、また、それを維持していくための考えについて、そして、「志」を達成するための姿勢や考え方について議論する。個人と社会の関わりについてや企業と社会のかかわりについても考えたい。

○最終回 まとめ：齋藤政彦、祇園景子、鶴田宏樹

3.3 振り返り

平成29年度・平成30年度において、講義中の議論と最終回のまとめから、「志」とは何か、「志」を持つ現在の環境、何を心に留めておかなければならないかについて学生と共有した。

筆者らは予め「志」をヒトが何かをする際“行動指針”と定義したが、本講義においては、講師の経験と想いをベースに議論することによって、「志」とは人生の目的・目標であり、指針・指標を含むより広義の意味を持つと考えられた。人生の目的とは、「自・他・社会の幸福」が前提であり、社会との繋がりの中で設定されるべきものである。そして、その目的・指針に基づいて「何を問題として捉えて、為すべきか＝当為」を考えることが次のステップとなる。そして「志」をしっかりともち、何を為すべきかを考えた上での次の行動は、「計画立案」「実行」である。この計画・実行フェーズにおいては、失敗を恐れず「やってみなはれ」精神で取り掛かることが重要である。講師の言葉では「一流の計画よりも二流の実行」が大事であると述べられた。この試行錯誤と失敗を恐れない楽観主義は、価値創造において重要なデザイン思考そのものである。すなわち、「志（行動指針）」を軸にして、様々な試行錯誤を繰り返すことが新たな価値創造に向けた行動の基盤となる、ということが共有された。

では、「志」そのものはどのように建てるべきなのか？それについても議論が展開された。学生を含めた現代人のこれからの未来は、「グローバル化」を意識して生きて行くことから避けられない。世界の文化・風習・人種などの多様性を理解しながら、日本固有の文化や習慣も同時に伝えることを念頭におく必要もある。また、デジタル化が加速し、AI・ビッグデータの存在意義がますます増大するとともに人間そのものの存在が再定義さ

れていく。人口分布では少子高齢化が進み、「人生100年時代」が到来する。全ての人間が活躍する社会が重要視させる中で、女性の社会進出を阻む「無意識のバイアス」など、これまで見えなかった問題もまた顕在化していく。各回に提出するコミュニケーションシートから、学生自身も自らがぼんやりと持っていた「志」を、これからの社会の変化を的確に捉えながら広い視野で、受け身とならないようなものにブラッシュアップしていくことの重要性を理解し、学生の間でどんどん行動を起こす必要があることを認識していることを鑑みることができた。

本講義は講師が座学的に一方向的に話す形式とは異なり、講義中あるいは講義最終日に講師の話から「志」についての議論を行った。その形式も学生にとっては新鮮で、講義終了後に記入するコミュニケーションシートには、「これまでの志の授業は自分が大きな志を持つ大きなきっかけになれたと思います」「この授業は他の授業とは大きく異なりましたが、新しい視点・考え方が得られるとても素敵な授業だと感じました」「この講義を通して、様々な分野の知識を得ることができた。それらを自信に変え、確かな志を持って、これからの大学生活、また人生を生きて行けたらいいと感じた」など、学生自らの行動指針に変容が認められた。各講義の満足度も「大いに満足」あるいは「ある程度の満足」の和が81.2%～93.6%と非常に高い満足度であった。

3.4 今後の課題

「志」講義も平成29年度、30年度と実施し、講義名が特徴的であることもあり、学生の中でも注目度が上がってきている。それに続く総合教養科目「企業社会論」、総合科目「Creative School 基礎編・応用編」に「志」講義の受講生が受講するケースも増えてきている。しかし、いくつかの課題が浮き彫りとなっている。本講義が学生に与えた影響をいかにして定量的に評価するか、本講義を教育プログラムとして定常化させるために必要である。この課題については次年度以降に教育心理や認知科学を取り入れた評価システムの構築を計画している。また、「志」講義を単なるオムニバス講義ではなく、学生自身の行動指針の明確化に資する機能をさらに強化して、他の講義群と連動させる仕組み作りが必要となる。現在、次年度開講に向けて、講師の選定と講義全体の設計をスタートさせている。

4. おわりに ～これからの大学教育として考えなければならないこと～

高等教育機関である大学は知の蓄積を基としつつ、未踏の地への挑戦により新たな知を創造し、社会を変革していく中核となることが期待されている（首相官邸 教育再生実行会議, 2013）。これまでの大学では、知的好奇心を満たす優れた知識を与える優れた講義を学生に提供することが大きな目的であった。それゆえに科学技術の発展の根幹となる研究と高度教育が大学の使命であった。現在でもそれは不変であるが、これからの大学はそれに加えて、複雑な問題を知の融合と活用を武器にして社会を変革できる人材を輩出する必要

がある。その基本的な資質となる「志」を学生が如何に醸成するか、そこが考えて教育体系を構築することが重要である。

参考文献

公益社団法人 経済同友会 (2015)『これからの企業・社会が求める人材像と大学への期待』

2015年4月2日 発表

鶴田宏樹・祇園景子・大村直人 (2018)「イノベーション人材育成の必要性和プログラム開発-未来道場による Creative School-」、『大学教育研究』第26号、神戸大学大学教育推進機構、pp.119-129

内閣府 (2016)『第5期 科学技術基本計画』 2016年1月22日 閣議決定

武田廣「平成30年度入学式式辞」神戸大学ホームページ

http://www.kobe-u.ac.jp/info/usr/speech/m2018_04_04.html (最終アクセス:2018年12月25日)

鶴田宏樹・祇園景子「企業社会論 B 2018 シラバス」

http://www.lab.kobe-u.ac.jp/eng-miraidoujo/news_report/20181003_pathos%20logos%20ethos/企業社会論 B_シラバス.pdf (最終アクセス:2018年12月25日)

本論文は鶴田宏樹が全体を執筆した後、他の3名が加筆した。